陰進

週刊

2024年
9月　第3週

発行元
最前線
anarcho.clitorist@gmail.com
編集　仁科 夏瑚

保存用　紙版
1ヶ月　300円

月毎に郵送いたします。
詳細は上記連絡先まで

アブナい？！「性別」破壊
～名古屋・「得三」イベントレポ～

HP上、登壇者4名の顔ぶれ

九月十九日、名古屋・今池のライブハウス『得三　Ｔｏｋｕｚｏ』にて『海上宏美・Ｃｒｏｓｓ　Ｔａｌｋ　Ｔａｂｌｅ　第二回「アブナい夜話」～トランスジェンダー、「性別」破壊？！～』が催された。予備校講師の海上宏美氏、文筆活動家の大野左紀子氏、岐阜県郡上市議会議員のみずのまり氏、「性別」破壊党党首の阿部智恵氏が登壇した。

会場では、大野氏が作成した資料が配布され、性に関する様々な分類やＬＧＢＴＱにまつわる最近の動向など、この資料に記載されている細かな説明自体が性別、とりわけ「トランスジェンダー」にまつわる状況の複雑さを物語っていると感じた（プリントの内容は基礎的なものであり、特定の考えに偏っているという印象は持たなかった）。イベントの前半では、大野氏、みずの氏、阿部氏がそれぞれの立場について話した。大野氏は、トランスジェンダーに関するＸ（旧ツイッター）上での自身の姿勢と議論の概略について語った。みずの氏は、自身のネットでの言説の変遷とレジュメへの補足を行った。

また、阿部氏は、スライドを交えて自身の主張である『「性別」破壊＝身体改変的性別越境主義』についての説明を行った。阿部氏は、『「性別」破壊』とは「男に生まれた者が子を産み、母になることができる状態」であり、「男／女の身体的性別二元論は維持しつつ、その両者間の越境が可能になった状態」であると述べていた。イベント後半は、大野氏から阿部氏への質問と応答、そして会場からの質問と登壇者からの応答がなされた。大野氏から鋭い質問が飛ぶ場面もあった一方で、観客として来ていた宗教学者の栗田英彦氏からも阿部氏の姿勢に対して厳しい質問も飛び出すなど、中身の濃い議論が展開された。また、登壇者にも関わりのある『情況』誌のトランスジェンダー特集についての言及もあり、参加者からの「閉塞した言論環境を変えるにはどうすればよいか」との質問に大野氏が情況誌を掲げて「こうあることです」と答える場面もあった。

トランス問題　どう立ち回るか？

正直なところ、自分もＴＥＲＦ（トランス排除派）とＴＲＡ（トランスの権利擁護派）の（特に女風呂、女子トイレに関する）終わらない議論に食傷気味になり、Ｘ上で「トランスジェンダー」の文字を見ると目を背けてしまう瞬間が多い。今回、典型的なＴＲＡともＴＥＲＦとも異なる登壇者の意見を聞いてみて、思考に蓋をして逃げずに、自分の立場から、問題の当事者の事も念頭に置きながら考えてみることから始めていくべきなのかもしれないと感じた。

また、栗田氏が阿部氏に対して述べた「革命家（という言い訳）に逃げないでほしい」という言葉も印象に残った。確かに阿部氏は、Ｘ上でもメタに「革命家」であること、「悪の組織」であることを自認している。しかし、どんな悪の組織も自分が「悪」とは微塵も考えていないのではないだろうか（むしろ自分たちは「正義」の側だと自認しているだろう）。革命も、どう変えるのかが重要であり、革命することをメタ的に強調しすぎることは、平成期に繰り返し訴えられた「改革」のように、言葉が空虚に響いてしまうのではないかと危惧する。真に革命を志向するならば、理念や革命実現の道筋をもっと練り、真剣に活動する中で「悪さ」が滲み出るようになった時こそが、「革命」を希求する「悪の組織」になった証ではないだろうか。（マグロノサシミ）

会場では阿部氏によるまとまった解説が行われた▲

突撃取材！　反動的文學集団 ROSEBUD

文フリで他とは異なる雰囲気は漂わせる謎のサークル「反動的文學集団ROSEBUD」。その主宰者・文乃綴氏に対して、9月12日に高田馬場で取材を行った。

同団体は、私たちの界隈では、『ドイツ保守革命Ⅰ』におけるエルンスト・ユンガーや、エルンスト・フォン・ザロモンの翻訳で知られる。しかしながら、氏によれば、ROSEBUDはあくまでも文芸サークルとしての活動がメインとのこと。元は三島由紀夫のシンパ・支持者が集まった団体で、三島の読解を進めるには思想の理解も必要になることから、翻訳活動も行うようになった。そのため、小説を書ける人間以外はメンバーに入れない方針をとる。現在は約7名ほどのメンバーが参加している。

ROSEBUDの名前の由来は、映画『市民ケーン』の冒頭から。文学の世界ではこれまで、常にリベラルの影響力が強く、また同人シーンでもポストモダン批評が支配的だった。そうした文脈においては、「三島はクソだ」という評価がドグマ的に支持されてきたという。文野氏は「王様は裸じゃないか」という文言を好んで用いる。身内でトレンドを消費し、身内で批評を行い、身内に本を買わせるような文学・批評界の予定調和に対する嫌悪感が活動の動機となっているようだ。

思想を何も知らないような素人が読んでもわかるものを作り、そうした人々に文フリの会場に来てもらうこと。また、左翼やリベラル思想のテキストばかりのなかで、右翼のテキストも紹介することなど、たしかに、彼らの活動には外部性を持ち込もうとする意図が感じられる。同氏によれば「その代わりにうちの部数はけは決してよくない」とのことだ。ROSEBUD VOLUMEシリーズは多くて20～30部、一番売れた『ナチスBLアンソロジー』でも、70+50で120部ほどだと証言している。

「反動的文學集団」として、右からの視点で活動を行ってきた同団体。ネトウヨでもなく、アンフェでもなく、「街宣車でハチマキ」でもなく、そしてファシスト的でもない……。彼らが掲げるのは「デカダン趣味でカッコよく」、「降伏もコイントスで決める」、三島が支持した文学者ダンヌンツィオである。それは単なる強さの誇示としてのマッチョイズムではなく、美学を伴ったダンディズムへの志向として現れる。（仁科夏瑚）

ダンヌンツィオ建国のカルナーロ＝イタリア執政府旗▼

▲最も売れた『ナチスBLアンソロジー』

「自立」と「協力」のもとに集え

クリトリスはアナーキストである！

カトリーヌ・マラブー
『抹消された快楽　クリトリスと思考』より

徒党

陰極

■演劇セリフ抜粋
私は荒れ狂う「意味」を相手に格闘した。セリヌンティウスは死んでいた。
劇団どくんご　第34番公演　『夏型天使を信じるな』より